

# 保育者養成の課題

－ 学生たちは2年間で何を学びどう育ったのか－

石田 一彦、東 義也、荒川 由美子、杉山 弘子

The Subject on Training for Nursery Teachers

－ What students learned and How they grew up in two years－

Kazuhiko Ishida, Yoshiya Higashi, Yumiko Arakawa, Hiroko Sugiyama

本研究の目的は、保育者養成の課程に2年間在籍し、卒業を迎えた学生に対する意識調査を通して、保育者養成の実態と課題を明らかにすることにある。宮城県にあるS短期大学保育科保育コースの2年生129名を対象にして、2007年3月の卒業時に、これまでの学生生活、卒業後の自分自身について、質問紙調査を直接的方法で行った。回収率は91.5%であった。

2年間の学生生活でほとんどの者が「保育の専門的知識と技能を身につけることができた」ことに、自らの成長を感じている。それは在学中特に力を注いだ活動に「授業」や「実習」を選択した学生が7割以上いたことにも表れている。授業の一環として行われている科の行事も含めれば、8割以上が授業に力を入れてきたことになる。卒業を前にしてもっと学びたかった専門分野として、「保育現場の実際」を挙げた者は6割を越えた。他の分野が3割以下であることをみれば、その要求の突出ぶりは際立っている。めざす保育者像については、広範囲にわたって重層的に回答が寄せられた。この研究を通して、学生たちが2年間でどう成長したのかを明らかにするとともに、学生一人ひとりが回答に寄せた思いをどう実現していくのか、保育者養成に携わる者の課題としたい。

キーワード：保育者養成、保育者像、成長感

## < 問 題 >

保育者は、幼稚園教諭および保育所やそれ以外の児童福祉施設の保育士、つまり保育の仕事に直接携わる者の総称である。幼稚園教諭は学校教育法の制定（1947年）以来、幼稚園教育要領の数度にわたる改訂によって、その役割に若干の変容はみられるものの、基本的な性格は維持したまま今日にいたっている。一方、保育士は児童福祉法の制定（1947年）以前、遠く明治期の草創期から1999年まで「保母」という名称で長く親しまれてきた。しかし男性保育者の増加などにより、1997年児童福祉法の改正にともなう児童福祉施設最低基準の改正によって、今日の保育士の名称が適用されることとなった。

また子育て支援の場として保育所に対する期待が大きく高まるなかで、2002年11月の児童福祉法の一部改正において、保育士資格は法的資格となった。登録制度や専門性が謳われるとともに、これまでの児童の保育に加えて、「児童の保護者に対する保育に関する指導」がその業務とされた。さらに「保育士は、正当な理由がなく、その業務に関して知り得た人の秘密を漏らしてはならない。保育士でなくなった後においても、同様とする」守秘義務の規定が設けられた。

こうした社会的背景の下で、わが国の保育者養成は行われており、その実践の場は4年制大学、2年制ないし3年制の短期大学、専門学校等々多岐にわたっている。それぞれの養成校は一定の(限られた)養成年限のなかで、所定のカリキュラムに基づいて学生の教育に当たっている。社会的に要請されている「質の高い保育者」の育成が保育者養成校の課題となる。

その課題を達成できるかどうかは、ひとえに学生の成長にかかっている。保育者養成に緊要なのは、保育者をめざして入学し、一定の修業年限を経て卒業を迎えた学生が保育者として必要な何を学んだか、さらに保育系の学生として自分自身の成長をどのように受けとめているかを明らかにすることである。それが本研究の第一の目的となる。

さらに、学生が卒業後の自分自身が保育の現場で働く姿をどのようにイメージし、その中で何を大切に保育しようとしているかを考えてみたい。それが保育者養成がどれほど成果を上げているかどうかを示す一つの指標ともなる。したがって、卒業時の学生が自分のめざすべき保育者像をどのように思い描いているか、そのなかで学生が誰とどのようにかかわろうとしているかを明らかにすることが、本研究の第二の目的となる。

さらには、以上のことを考察することを通して、保育者養成の課題を浮き彫りにするのが、本研究の第三の目的となる。

#### <方 法>

1. 調査対象者：保育士および幼稚園教諭二種免許状取得可能な保育科2年生
2. 調査実施時期：2007年3月卒業礼拝終了時
3. 手続き：対象者が集合している場面で、質問紙を一斉に配布、その場で記入してもらい回収する。後に連絡を取ったりするために記名にしてもよい人には氏名を記入してもらい、無記名希望も可とする。
4. 質問内容：次のような内容を尋ねている。
  - ① 学生自身について(通学方法や卒業後の進路など)
  - ② 学生生活について(成長感、在学中に力を注いだ活動、専門分野の学習内容と方法など)
  - ③ 保育者になるにあたって(保育者観、就職に際しての不安の有無とその内容)
  - ④ 卒業後の大学とのかかわり(大学への期待、科の将来像について)

#### <結 果>

##### 1. 学生自身について

回答者数は118名である。これは本研究の質問紙調査の対象となった保育コースの卒業間近の学生129名の91.5%である。

まず、出身地について尋ねたところ、県内85名(72.0%)、県外33名(28.0%)であった。次に在学中の通学方法について尋ねた結果は、自宅生が78名(66.1%)、自宅外生は37名(31.4%)、在学中に引っ越し等で両方と答えた学生は3名(2.5%)であった。

次に、実習にはどこから通ったかを尋ねた。幼稚園実習については、自宅からが116名(98.3%)、自宅外からとその他(無答)は各1名であった。保育所実習については、自宅からが117名(99.2%)、自宅外からは1名である。保育所以外の児童福祉施設、いわゆる施設実習については、自宅からが67名(56.8%)、自宅外は8名(6.8%)、その他は宿泊で43名(36.4%)

であった。

卒業後の進路希望がどこにあったか、また、実際の進路はどこに決定したかを尋ねた。調査時点での結果は、表1のとおりである。

次に就職決定者の雇用形態について尋ねた。結果は表2のとおりである。幼稚園や保育園に非正規で雇用されるケースが、年々増加している傾向は否めない。なお、保育所に就職の決定した54名の内、認可外施設に就職する学生は1名である。

表1. 進路希望と決定先 単位：人

	希望進路	決定先
幼稚園	41	40
保育所	55	54
福祉施設	4	1
一般企業	5	5
進学	7	9
その他	0	1
幼 + 保	4	/
幼 + 一般	0	0
無 答	2	8

表2. 就職決定者の雇用形態

単位：人

	幼稚園	保育所	福祉施設	一般企業	進学	その他	無 答	計
正 規	30	14	0	4	0	0	0	48
非 正 規	10	40	1	1	0	0	0	52
無 答	0	0	0	0	9	1	8	18
計	40	54	1	5	9	1	8	118

## 2. 学生生活における成長感

短大の2年間の過密するカリキュラムの中で、学生は自らをどのように成長したと感じ、また、評価しているのであろうか。これらを確認するため、「短大に入学してからこれまでに、どのように成長したと感じますか」という設問と回答例を設定し、特に強く感じることを二つまで選択可能とした。結果は表3の通りである。

表3. 成長感(1)

単位：人 (%)

成長したと思われる内容	選 択 者
保育の専門的知識と技能を身につけることができた	100 (84.7)
教養を身につけることができた	17 (14.4)
人間性を豊かにできた	41 (34.7)
社会性を身につけることができた	14 (11.9)
自律的に生活できるようになった	18 (15.3)
社会に目を向けることができるようになった	30 (25.4)
その他	0 (0.0)
無 答	2 (1.7)
全 体	118 (100)

「保育の専門的知識と技能を身につけることができた」(以下「専門」と記す)という回答が、100人と最も多く、全体の84.7%の学生が選択していた。この項目のみが半数を超えている。そして、次に多い項目は「人間性を豊かにできた」(以下「人間性」と記す)で41人(34.7%)、次いで「社会に目を向けることができるようになった」(以下「社会に目」と記す)で30人(25.4%)という結果であった。残る3項目は10%台であった。

選択可能とした2つの項目の組み合わせに注目したとき、「専門」と「人間性」の組み合わせが最も多く、118人中34人(28.8%)である。次に多い組み合わせは、「専門」と「社会に目」で24人(20.3%)という結果である。この2つの組み合わせでおおよそ半数を占めていることが分かった。

### 3. 在学中に力を注いだ活動

学生が、在学中に特に力を注いだ活動について尋ねた。そのために、学生として修めるべき正規の学習や学校行事と、それ以外のものについても選択肢を上げ、2つまで選択可能とした。その結果は表4の通りである。

表4. 力を注いだ活動 単位：人 (%)

活 動 内 容	選 択 者
授業を受けることや授業に関連する課題	65 (55.1)
学外での実習	37 (31.4)
卒業演奏会やオーケストラの定期演奏会	19 (16.1)
合唱コンクール、体育大会、大学祭などの行事	22 (18.6)
学生会や委員会活動	4 (3.4)
部活やサークル活動	22 (18.6)
就職活動	18 (15.3)
アルバイト	31 (26.3)
その他	4 (3.4)
全 体	118 (100)

これによると「授業を受けることや授業に関連する課題」(以下「授業」と記す)が65人(55.1%)と最も多く、この項目のみ半数を超えた。次いで「学外での実習」(以下「実習」と記す)いわゆる保育実習や教育実習に力を注いだという回答が、37人(31.4%)である。そして、3番目に多い回答は、学業とは直接関係のないアルバイトであった。31人(26.3%)という数字は、4人に1人がこの項目を選択したことを表している。さらに、「就職活動」(以下「就職」と記す)を選択した学生は、18人(15.3%)で、10人中1人ないし2人である。

この結果についても、2つまで選択可能としているので、学生が力を注いだ活動の組み合わせを見るために表を別に作成した。それが表5である。

これによると、「授業&実習」(分類A)を選択した学生は17人(14.4%)である。「授業」は選択したが、「実習」以外のものとの組み合わせ(分類B)を選択した学生は48人(40.7%)、「実習」を選択し、もう一つを「授業」以外のものとの組み合わせ(分類C)を選んだ学生は20人(16.9%)であった。つまり、選択した2つのうちどちらかに「授業」または「実習」を選んだ学生は、計85人(72.0%)ということになる。(分類A、B、C)分類Dの「卒業演奏会やオーケストラの定期演奏会」(以下「卒演」と記す)は、科の行事であるが、これらも授業の一環として行なわれるものなので、「授業」の枠内と考えて含めると、97人(82.2%)となり、8割以上の学生が授業関連の活動に力を注いでいたことになる。

なお、分類Eとは、学業とは直接関係しない選択項目群である。これらを選択した学生は、20人(16.9%)であった。

表5. 力を注いだ活動の組み合わせ

単位：人

分類	選択した活動		選択者	
A	授業	実習	17	17
B	授業	アルバイト	15	48
	授業	部活	11	
	授業	行事	8	
	授業	卒演	6	
	授業	就職	6	
	授業	その他	1	
	授業		1	
C	実習	部活	6	20
	実習	アルバイト	3	
	実習	行事	3	
	実習	就職	3	
	実習	学生会	2	
	実習	卒演	1	
	実習		2	
D	卒演	アルバイト	4	12
	卒演	就職	3	
	卒演	行事	3	
	卒演	部活	1	
	卒演		1	
E	アルバイト	行事	3	20
	アルバイト	就職	2	
	アルバイト	その他	2	
	アルバイト		2	
	部活	行事	2	
	部活		2	
	行事	就職	2	
	行事	学生会	1	
	就職		2	
	学生会		1	
その他		1		
	無答		1	1
	計		118	118

#### 4. もっと学びたかった専門科目の分野

卒業式を翌日に控えた時点で、もっと学びたかった保育の専門分野があるとしたら何かを、2つまで尋ねた。結果は表6の通りである。

最も多かったのは、「保育現場の実際」（以下「実際」と記す）で73人（61.9%）であった。今後現場で使えるもの、また、実際に体を動かして学ぶものを求めているようである。

次いで、「子どもの発達と心理」（以下「心理」と記す）が34人（28.8%）、「乳児保育・障害児保育など、特別な配慮を要する保育」（以下「特別配慮」と記す）が33人（28.0%）、そして「音楽、造形、体育などの基礎技能」（以下「基礎技能」と記す）が28人（23.7%）という結果であった。それ以外の分野は20%以下であった。

この回答についても2つまで選択可能としたので、その組み合わせに注目すると、最も多い組み合わせは、「実際&心理」の16人、次いで「実際&基礎技能」15人、「実際&特別配慮」

14人、そして「心理&特別配慮」13人であった。全体の10%を越える組み合わせは、この4組のみである。

表6. もっと学びたかった専門科目の分野 単位：人（%）

専門科目の分野	選 択 者
保育・教育の基本原理	4 (3.4)
保育現場の実際	73 (61.9)
子どもの発達と心理	34 (28.8)
子どもや障害児・者の福祉	18 (15.3)
子どもの健康と安全	3 (2.5)
家族支援	18 (15.3)
5領域の保育内容と指導法	8 (6.8)
乳児保育・障害児保育など、特別な配慮を要する保育	33 (28.0)
音楽、造形、体育などの基礎技能	28 (23.7)
その他	0 (0.0)
無 答	3 (2.5)
全 体	118 (100)

### 5. 保育者となる上での必要なことの修得感

「保育者となる上で必要なことを十分に身につけられたと思いますか」という設問に対する回答を表にまとめたものが表7である。

表7. 保育者となる上で必要なことを身につけられたか 単位：人（%）

修 得 感	選 択 者
そう思う	23 (19.5%)
どちらかと言えばそう思う	86 (72.9%)
どちらかと言えばそう思わない	8 (6.8%)
そう思わない	0 (0.0%)
わからない	1 (0.85%)
計	118 (100%)

「そう思う」と答えたのは、118人中23人（19.5%）であった。そして、「どちらかと言えばそう思う」が最も多く、86人（72.9%）であった。「そう思う」と合わせれば、109人（92.4%）であり、90%以上の学生が、保育者になるために学んできたことを肯定的に修得できたと思っていることが分かる。また、「そう思わない」と答えた者は一人もいなかった。

### 6. 学生がめざす保育者像

学生に「どのような保育者をめざしていますか」と自由記述で尋ねた。この設問を通して、学生一人ひとりが卒業後保育の現場で働く自分自身をどのように思い描いているか、そのなかで何を大切にして保育を進めていこうとしているかを明らかにしようと考えた。

卒業後保育者になることを希望している学生96名中、91名から回答があった（94.8%）。自

由記述ということもあり、学生一人ひとりから思い思いの回答が提示された。最初の作業は、91名から出された回答をいくつかのカテゴリーにまとめることであった。

学生がめざす保育者像は、子どもとのかかわりを中心とする内容が圧倒的多数を占めたが、そのほかに保護者、職場の同僚、さらには自分自身に向けられたものもあった。それらの一つひとつの回答がいくつかのカテゴリーにまとめられ、その結果重層的な構造となった。つまり学生一人の回答が子どもだけでなく、同時に保護者や同僚、自分自身にも向けられるというケースが数多くあった。したがって、いくつかのカテゴリーにまとめられた回答項目の総数は、91の回答者数を大きく上まわり、150を数えることとなった。それらのことを一部示したのが、表8である。(自分自身への回答は29)

表8. めざす保育者像 単位：人

カテゴリー	子ども	保護者	同 僚
共感	35	3	1
第一	17		
信頼	13	8	4
一人ひとり	9		
愛	6		
内容	4		
受容	4		
あそび	3		
向き合う	3		
理解	2	1	
しつけ	2		
思いやり	1		
配慮		2	
連携		2	
支援		1	
計	99	17	5

次に、学生一人ひとりが卒業後自分が望む保育者をめざして誰とどのようにかかわろうと思いを描いているかを示した。一つひとつの回答項目がどのようなカテゴリーにまとめられたのかとともに、その集計結果を記すことにする。

#### (1) 子どもとのかかわり

子どもに関する回答を寄せた学生は、77人であった。91人中77人ということで、回答者全体（以下「全体」と記す）の84.6%となった。次に回答項目をどのようにカテゴリー化したかについては、最初に大枠としていくつかの概念を考えた。「子どもに対する基本的姿勢」、「子どもへの共感性」、「子どもとの信頼関係」、「保育の内容・方法」である。このように大別したものは、内容的に相互に関連しており、重なり合う部分もみられる。その結果、一人の回答の中にカテゴリーが重複するケースが22あり、子どもに対しての回答項目の総数は合計99となった。



① 子どもに対する基本的姿勢

「基本的姿勢」は、保育に当たって子どもへの基本的姿勢をなによりも大切にしたいと考えている回答である。これは、保育をどうとらえるかという保育観につながるものであり、その根底には学生一人ひとりの子ども観が示されているといえよう。その意味では、広範囲にわたる内容となっている。

そのようなこともあり、この「基本的姿勢」を自分がめざす保育者像の中核に据えたのは、91名のうち42人となった。全体の46.2%、半数近い学生が回答したことになる。

次にそれを細分化したカテゴリーに話を移そう。内容が広範囲にわたっていることもあり、7つというかなり多くのカテゴリーに分類された。「子ども第一」、「子ども一人ひとり」、「子どもへの愛」、「受容」、「子どもと向き合う」、「子ども理解」、「思いやり」の7つである。それらの一つひとつのカテゴリーについて、若干のコメントを記す。

㊦ 「子ども第一」は17人で、その内容は「子どものことを第一に考えられる保育者」、「子どもの気持ちを大切にしたい」、「子どものために最大限努力する保育者」、「子どもと一緒に汗を流し、子どものために考えられる保育者」などである。

㊧ 「一人ひとり」は9人で、その内容は「一人ひとりの個性を見ることのできる保育者」、「子ども一人ひとりの宝探しができる保育者」、「一人ひとりその子の良さ、その子らしさを大切にしたい保育をしたい」などである。

㊨ 「子どもへの愛」は6人で、「ほめる、叱るなど様々な形の愛情をたくさん注げる保育者」、「子どもたちの日常を大きな愛で包まれたものにする」などの回答があった。

㊩ 「受容」は4人で、その内容は「子どもの気持ちを受容できる保育者」、「子どものありのままを受けとめられる保育者」などである。

㊪ 「子どもと向き合う」は3人で、「子どもたちとまっすぐ素直な気持ちで向き合っていきたい」などである。

その他「子ども理解」は2人、「思いやり」は1人であった。

② 子どもへの共感性

集計結果によると、「共感性」に関する回答を寄せた学生は35人である。91名の学生のうち、38.5%、つまり4割近くの者が回答している。回答にはさまざまなパターンがみられたが、それらをいくつかのカテゴリーに分類するまでにはいたらなかった。

あえて回答の内訳をいくつかの類型にまとめてみると、「子どものことを理解して、共感できる保育者」系が17人、「子どもの気持ちに寄り添える保育者」系が9人、「子どもの目線に立つことができる保育者」系が6人などである。その他「子どものありのままの姿を受け止め、認める保育者」、「子どもたちのその時々表情（感情）を大切にできる保育者」と回答した者もいた。

「子どもにとって嬉しい先生」と回答した学生が4人いた。

③ 子どもとの信頼関係

「信頼関係」を掲げた者は13人、全体の14.3%であった。これはそのまま一つのカテゴリーとなっている。

回答内容をみると、「子ども一人ひとりと信頼関係を結ぶ」、「子どもにとって安心できる保育者」、「子どもとお互いに尊敬し合える関係を築ける保育者」、「母親のような頼れる保育者」などがあった。



#### ④ 保育の内容・方法

保育の内容・方法に関する回答は、9であった。全体の9.9%に当たる。これらは、「保育の中身」、「あそび」、「しつけ」の3つのカテゴリーに分けられる。

「保育の中身」を挙げた学生は4人いた。その内容は「子どもたちが毎日楽しいと思えるように取り組んだり、行動できる保育者」、「引き出しがたくさんあって、子どもに先生みたいな大人になりたいと思われるような保育者」などである。

「あそび」は3人、「しつけ」は2人である。「しつけ」の2人の回答は、「善悪の区別をしっかり子どもに伝えられる保育者」、「ありがとう、ごめんねを伝えることの大切さを伝えていきたい」であった。

##### (2) 保護者とのかかわり

保護者に向けられた回答は17人であり、全体の18.7%に当たる。その内訳は、「保護者からの信頼」、「保護者との共感性」、「保護者との連携」、「家庭への配慮」、「保護者への理解」、「保護者支援」の6つのカテゴリーとなった。

「信頼」への回答は8人で、「保護者から信頼される保育者」がやはりほとんどである。「共感」は3人で、「親の気持ちにも自然に寄り添える保育者」などである。「連携」は2人で、「保護者との連携がとれる」である。「配慮」は2人で、「家庭など子どものまわりの環境にも目を向けていきたい」などである。「理解」、「支援」はともに1人である。ちなみに「支援」の回答は「暖かい心で様々な視点から物事を見て保護者を援助しながら子どもの育つ姿を見守りたい」であった。

##### (3) 職場の同僚とのかかわり

職場の同僚に向けての回答は5人で、全体の5.5%である。カテゴリーは「同僚からの信頼」と「同僚との共感」に二分される。

「信頼」は4人で、「職場の先生方に信頼される保育者」となる。「共感」は1人であった。

##### (4) 自分自身に対して

自分自身に向けてめざす保育者像を描いたのは29人あり、全体の31.9%に当たる。子どもに対する回答に次ぐ数の多さとなった。その内容もきわめて広範囲にわたり、結局16の下記のカテゴリーに分かれることになった。

「自分自身の成長」は7人、「子どもたちと一緒に自分も成長していけるような保育者」、「成長し合える保育者」「先輩の先生方の保育や指導の仕方を学び、自分に足りないものを取り入れていきたい」などがその内容である。

「明朗」は6人で、「明るく元気な保育者」、「笑顔を忘れない保育者」などに集約される。

「優しさ」、「子どもの模範」はともに2人である。「子どもたちを包み込むやさしさをもった保育者」そして「子どもの鏡（手本）となれるような保育者」の回答がそれぞれみられた。

回答1人のもものとしては、次の12のカテゴリーが上げられる。「思いやり」「親切」「柔軟」「楽しむ」「遊ぶ」「基本」「前進」「自覚」「表現」「自由」「自己愛」「地域」である。

最後の「地域」は「地域密着型の保育者」ということで、他の回答とはやや異質の感がある。地域に向けられた性格のものとして、本来は別枠を設けるべきかもしれない。

## 〈考 察〉

### 1. 学生生活における成長感

2年間の学生生活のなかで何に自分の成長を感じているかについては、「保育の専門的知識と技能を身につけることができた」と答えた学生が84.7%と圧倒的多数を占めた。この項目は、おそらくほとんどすべての学生が入学時に抱いた目標であったであろう。同時にそれは保育者養成校にとっても、教育の第一方針である。その回答者がこのようにきわめて高い割合を示していることは、学生にとっても、養成校にとっても一応初期の目的を達したことになる。

次に多い「人間性を豊かにできた」(34.7%)は、保育科のなかで合同で行われる行事(卒業演奏会、定期演奏会)等への取り組みや友人同士、教員との日常的な交流などの反映であろう。「社会に目を向けることができるようになった」という回答が、25.4%あったことにも着目したい。

S短大保育科の教育目標に掲げている「豊かな人間性」と「深い社会認識」が一定の成果を収めているといえる。それは同時に、共通教育(一般教育)と専門教育が車の両輪として機能していることを意味している。

### 2. 在学中に力を注いだ活動

在学中に特に力を注いだ活動については、「授業を受けることや授業に関連する課題」が55.1%と最も多く、この項目のみが半数を越えた。中坪(1993)も「真剣に講義を聴講することは、保育者を目指すうえで重要であるとの意識は強い」と報告している。

次いで「学外での実習」保育所等での保育実習、幼稚園での教育実習に力を注いだという回答が、3割強あった。ちなみにこの両者の双方あるはいずれかを選択した学生は、7割を越えている。科の行事であり、授業の一環でもある「卒業演奏会や定期演奏会」を加えれば、8割以上の学生が授業につながる活動に熱心だったことになる。

しかしここでもう一度「授業を受けることや授業に関連する課題」が複数回答(二つまで)にかかわらず、5割強の回答に留まったことに着目したい。上記の「専門的知識と技能」に自らの成長を実感している学生が8割半ばいることと比較すれば、5割強の数字は必ずしも高いとはいえない。逆にそのことを通して、「専門的知識と技能」の内実が問われることとなる。

「アルバイト」と答えた学生が、26.3%と意外に多い結果となった。4人に1人が選択したことになる。経済的理由による場合もあるだろうし、社会勉強を兼ねての人もいるだろう。そこで人間関係が広がったというケースもあるかもしれない。いずれにしても、勉学とは別にアルバイトが学生生活に占める割合が高いことが分かる。

「就職活動」は15.3%とアルバイトよりも低い。一般的には就職活動の方が高いと思われるが、この結果は保育科の特殊事情によるのであろうか。その一つは就職活動の本格的な始まりが実習終了後の10月からと遅いこと、もう一つは就職率が良いということから来る緊迫感の弱さが考えられる。

### 3. もっと学びたかった専門科目の分野

もっとも多かったのは、「保育現場の実際」(61.9%)であった。第2グループとしては、「子どもの発達と心理」(28.8%)、「特別な配慮を要する保育」(28.0%)、「基礎技能」(23.7%)が挙げられる。これらの具体的な分野に比べて、「保育・教育の基本原則」(3.4%)をはじめと

する原理的な学びについては、要求がきわめて少ない結果となった。卒業を前にして、これから保育の現場のただなかで日々子どもたちとかわろうとする学生たちにとって、まずは現場で役立つであろう分野に関心が向かうのは当然のことかもしれない。

#### 4. 保育者となる上での必要なことの修得感

「保育者となる上で必要なことを十分に身につけられた」(19.5%)と答えた学生は約2割で、「どちらかと言えばそう思う」(72.9%)と答えた者を加えると、92.4%もの学生が、保育者に必要なことを修得したと思っているという結果となった。「そう思わない」と答えた者は一人もいなかった。

これは、ほとんど大部分の学生が自ら保育者になるために学んできたことに一定の成果を実感していることの表れといえる。それは2年間の勉学を肯定的に受け止めるとともに、それに充足感を感じていることを意味している。その点では、学生のほとんどが保育者として必要なことを身につけたというこの結果は、保育者養成の成果として誇るべきなのかもしれない。

筆者らはこれまでも、養成機関における一定の年限の学びと就職後の現場での実践を通して、一人の保育者が育成されると考えてきた。そうした観点からすると、圧倒的に多数の学生がわずか2年間で保育者に必要なことを修得したと答えていることに着目せざるをえない。保育の奥深さを学生に伝えていくことが、依然として重要な課題とならざるをえない所以である。

#### 5. めざす保育者像

学生がどのような保育者をめざしているかについては、上に詳細な結果を示した。ここでは細かい分析はできるだけ控えて、総合的な考察に心がけたいと思う。

子どもとのかかわりに関する回答を寄せた者が84.6%ときわめて高い割合を示していることは、卒業を前にした学生たちにとっては当然のことといえる。学生が保育について考えるとき、保育の対象であり、主体でもある子どものことで頭がいっぱいとなるのは、首肯できることである。保護者や同僚とのかかわりにふれた回答数が合わせて22あるが、子どもから離れての単独の回答は1件であり、皆無に近い。それに比べて、自分自身に向けられた回答は多岐にわたるとともに、29の回答のうち自分自身にのみ向けられたものは13に上る。めざす保育者像が何よりも子ども、その次には自分自身に向けられていることがここからも分かる。

子どもに関しては、子どもと学生自身との関係に終始した回答がほとんどすべてであり、子ども同士の関係をどう形成していくのかにふれた回答はなかった。今後保育実践を重ねるなかで、保育の広がりを考える姿勢が少しずつ確かなものとなっていくことを期待したい。

同様のことが、地域とのつながりについてもいえる。地域とのかかわりにふれた回答はわずか1つであった。地域の子育て支援が保育の柱の一つとなっている現在、この数字には物足りなさを感じざるをえない。

それらは同時に、保育者養成校としてのS短大の課題ともなる。保育についての認識の広がりや先述した保育の奥深さ、つまり深まりへの理解をカリキュラムを通して学生が獲得することが、保育者養成の質の向上に直結したものとなる。さらにそれは〈問題〉の中で述べた「質の高い保育者」の育成へとつながっていくのである。

〈文 献〉

- 大村恵子・神田英雄 1990 保育科学生の就職後の生活と意識変化 名古屋短期大学研究紀要第28号  
p. 1～32
- 神田英雄・大村恵子 1991 保育者における保育観・やりがい感の成長と大学教育－予備的研究  
名古屋短期大学研究紀要第29号 p. 71～93
- 大村恵子・神田英雄 1992 保育科卒業生の保育者としての成長とその要因－大学教育の役割を中心に  
名古屋短期大学研究紀要第30号 p. 21～61
- 中坪史典 1993 保育志望学生の学生生活実態とその意識改革の支援に関する研究  
保母養成研究第11号 p. 15～23
- 全国保母養成協議会専門委員会編 1993 保母養成校卒業生の就業調査－卒業後の仕事に関するアンケート  
保母養成資料集第9号 p. 1～106
- 三木知子・桜井茂男 1998 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響 教育心理学研究第46巻  
第2号 p. 83～91
- 付記 本研究は、筆者ら4名で行った保育者養成カリキュラムに関するアンケート調査をもとに「保育者養成  
の課題－学生たちは2年間で何を学びどう育ったのか－」に関して報告したものである。